

## キープ協会史点描（二）

### 初期の清泉寮とキープの活動を支えた人々

松平信久

#### 1. はじめに

本稿は、本誌第一六号（二〇一九年三月）に掲載した「キープ協会史点描（一）清里一帯の開拓と入植者」の続編である。同稿では、キープ協会の活動拠点である清里の地域的发展の経緯をたどり、その上で、高冷不毛のこの地域の開拓に従事した入植者の労働と生活の姿を追い、さらにこの地で新しい活動の展開を目指したポール・ラッシュユや他の数名の先覚的指導者の事績の検証を試みた。

ポール・ラッシュユは、一九三六（昭和一一）年に初めてこの地を訪れ、一九三八年七月には青年を中心としたキリスト教活動の担い手を育てるための施設として「清

泉寮」を竣工させた。清泉寮は太平洋戦争の勃発により一時その活動を停止せざるを得なかったが、戦後再開され、曲折を経ながら現在に至っている。

ポール・ラッシュユの戦後におけるこの地での活動は、キリスト教民主主義の日本での育成・定着を目指し、新しい高冷地農業の創生を計り、「食糧」、「健康」、「信仰」、「青年の理想」を追求する「清里農村センター」、その発展としての「キープ協会」の設立・運営を軸として進められた。

本稿は、このような経緯のもとで、ラッシュユの理想に共鳴し、あるいはその誘いを受けてこの運動に参画した、活動初期の人々の動機や活動の様子を描き出そうとするものである。この検証は、これらの人々の協力と献

身がなければ、清泉寮の建設・運営も、キープ協会の発足・進展もありえなかったと思われるからであり、キープ協会史を辿るうえで必須の課題であると考えられるからである。

執筆、掲載にあたり予めつぎのことをお断りしておきたい。

(1) ここで取り上げる人物は、主に『日本聖徒アンデレ同胞会史』(日本聖徒アンデレ同胞会、一九九七年)(以降、『同胞会史』1997と記述)を参考に、本テーマに該当する人物を取り上げている。原則として現地清里に定住もしくは長期滞在した人、労働奉仕や実地調査のために足繁く現地に通った人を対象とする。

(2) 本テーマに該当する人物は、和洋を問わず無数いるといえるであろう。その全容をとらえ記述することは資料的にも物理的にも不可能である。従って、その中の限定された人物をとりあげざるをえない。そのための抽出にあたっての筆者の偏りや、資料の未確認のために、重要な人物を洩らしている可能性がある。(以降、人名の敬称略)。

(3) 標題に掲げた「初期」とは、一九三六年前後から一九七〇年前後をさしている。

(4) 二〇一九年に、井尻俊之編『PRO DEO ET PATRIA ポール・ラッシュ博士を語る証言録』が刊行された。同

書はラッシュと繋がりがあった多数の人物との膨大な面接記録である。本稿ではこの証言録にも多くを負っている。(以降、井尻 2019と記述)。

## 2. 一九三七年の清泉寮開設に関わった人たち

### (1) 関口正吾

富士山の見える場所に研修場を作りたいとのポール・ラッシュの強い要望を実現させるために山梨県内の候補地探しを託された一人は関口正吾であった。関口は立教中学校から立教大学に進み、BSAに入会しポールと出会った。関口は一時期山岳部に所属したことがあり、その経験から、彼はまだ学生であったが適地探しを乞われたのである。(『同胞会史』1997 p.46)。関口は富士五湖周辺を探訪したが、苦心の上によく見つけた折角の候補地が「特別景勝保護地」であるために山梨県の承認を得られず暗礁に乗り上げてしまった。そのおりに宿泊していた甲府の談露館の主人から清里の地を紹介され、ポール・ラッシュ、関口正吾、金子忠雄の三人が早速そこを訪れた。ラッシュはすぐにその地が気に入って、県有地であるその地を借用することに決めたのである。

関口は、引き続き清泉寮建設にあたって、BSA側の現場担当者の役割を担った。その動機は次のようなも

のであった。

私は、立教を（昭和）一三年度の卒業で、卒業と同時に清泉寮の建設に立ち会った。（中略）（卒業の時点で）ポールに相談すると、「清里の土地を探したのはおまえだろう。清泉寮の建設を手伝え」と強引だった。考えてみれば、日華事変がひどくなり、軍隊に召集されることは分かっていた。戦地に行けば死ぬかもしれないし、帰ってこれられないことは分かっていた。人生の一番大事なときだから、一生の思い出に、後世に残ることをしよう、何か人生の有意義なことをしようと思った。（中略）私は「戦死する前に、これまで皆さんの厄介になって生きたのだから、その証しに石一つでも積んでおきたい」と、ポールの依頼に応えることにした。（井尻 2019, p. 48）。

こうして清泉寮建設に当たって現地に駐在しその進捗を図ったが、彼の具体的任務は以下のようなものであった。

清泉寮の建設で、私は一種の現場の立会人で、業者の連絡調整係をして、現場に運び込まれてくる資材を受け取り、約束通りの物が来ているか、チェッ

クする役をしていた。清泉寮を建設する材木は、山梨県から八ヶ岳の材木を払い下げてもらい、雪の中を切り出してきた。雪は胸のところまで残っていた。木場道を新たに作り、搬出した。その道は川俣溪谷の川俣橋のきわから清泉寮まで切り開いて作った。現場では、目貫さんという人から寄付してもらったガソリンの製材機を持ち込んで、作業をした。（中略）昭和一四年の夏<sup>(1)</sup>は、大々的に立教の学生がボランティアで援助した。現場はひっきり返るような大騒ぎとなった。学生が来る前に、以前のけもの道を切り開いておいた。グラウンドの造成は学生がやった。鉄道の工事をしていた朝鮮の人たちが随分といたが、その人達に支払う金がないので、学生を動員した。学生は夏休みなので、三〇〇四〇人は来ていたと思う。（井尻 2019, pp. 49-50）。

関口は間もなく徴集を受け日本を離れた。戦後、再び清泉寮に赴任し、その復興に携わるが、その様子は後述する。

## （2）立教大学学生

関口の回想にもあるように清泉寮建設にあたっては学生の助力が重要な役割を果たした。（建設工事の施行は

甲府の内藤工務店であった)。立教大学では学生間に清泉寮建設援助運動がおこり、BSAをはじめ、野球、水泳、米式蹴球、サッカー、ボクシング部の勤労奉仕グループが清里に乗り込んだ<sup>(2)</sup>。このことは、本稿の(一)でも述べた、この施設が地元の人から「りつきょう」と呼ばれた所以でもあった。この活動に加わった当時の学生、伊達宗浩<sup>(3)</sup>の回想を以下に引用しよう。

清泉寮事始<sup>(4)</sup> 立教学院事務局長伊達宗浩

私が立教大学のBSAワークキャンプに加わって初めて清里を訪れたのは、昭和十二年七月、予科三年の夏休みであった。

年来の希望であったBSAのキャンプサイトが清里に決まったので、建設工事の下準備をしようというのがこのキャンプの目的で、一行の人数は二十名足らずであった。

中央線小淵沢駅で小海線に乗りかえての旅程は、今も四十年前と変っていないが、沿線の風物には既に当時の面影はない。(中略)

私たちが木造の小さな清里駅に降りたのは闇が駅舎を包み始める頃であった。改札口を出て、だらだら坂を五十米も下ったところに、古びた二階屋の旅人宿<sup>(5)</sup>があった。夕闇をすかして眺めても他に民家

らしいものはなかった。宿の二階でゆれている裸電球の赤い光が、佗しさと里心をかきたてた。ここが清里での最初の私たちの宿舎であった。(中略)

この年、私たちは一ヶ月余りをこの旅人宿で過した。ワーク・キャンプの目的はキャンプの建築資材を駅から運び上げるために現場までへの道を拓くことであった。小海線の線路から上は一帶の灌木林であった。鎌と鉋で密生した灌木の原野を切り拓く労働は楽でなかった。太陽が傾き、日が翳るとぶよに悩まされた。宿に帰って作業ズホンを脱ぐのに苦勞する程脚が腫れあがつていたこともある。夜は夕食がすむと何もすることがないので、裸電球の佗しい光の下で東京から持参したポータブル蓄音機でレコードを聴いたり、将棋を指して過した。

### 3. 戦後間もなくの活動に関わった人たち

#### (1) BSAの再建

戦争中、活動を停止していた日本BSAは、一九四五年一月三〇日に、早くも「BSA再建委員会」を発足させている。そのメンバーは、委員長・金子忠雄、副委員長・落合勝一郎、主事・八木立三、他委員七名という構成であった。この委員会に委ねられた課題の一つは、

新生BSAの体制づくりで、その翌年の一二月に開かれた総会で再建委員会の提案により、新役員が次の通り選出された。

会長・小川寛一、副会長・金子忠雄、財務理事・落合勝一郎、理事・小川徳治、和田利一郎、根本弘道、山本禮一、丹呉長光、小林武雄、陳 兆民、関口正吾、監事・大平芳男、主事・八木立三（『同胞会史』1997 p.28）。

この理事会メンバーの多くは、戦前の立教大学BSAの会員であり、ポール・ラッシュの薫陶を受けた人々であった。

戦後、日本に復帰したポール・ラッシュは、一九四六年には清里を訪れそこでの活動を再開する。物質的精神的両面において壊滅状態の日本の状況を見て、ポールの活動のテーマは、キリスト教民主主義を戦後の日本に導入し浸透させること、また食糧、医療の面で農村の生活の向上を図ること、青年たちに希望を与えることに焦点化された。そのために先ずその拠点となる「清里農村センター」構想を策定している。

## （2）聖職者たち

そのセンターの中核として、教会の設立とそこで活動する聖職者の着任が必須条件となる。清里での活動を再

開するにあたり、先ず現地に赴任したのは二人の聖職であった。

### （1）宿谷栄と植松従爾

植松の文章から清里への赴任の様子を探ってみよう。

終戦の翌年の春（一九四六年）宿谷司祭と植松執事は当時の佐々木鎮<sup>④</sup>二首座主教<sup>⑤</sup>から「清里に行きポールラッシュ氏の計画に協力せよ」という辞令をいただき早速現地に赴きました。清里駅の裏から山にはいり、学生時代の記憶を辿りながらなんとか無事に清泉寮に着きました。無人のキャビンを掃除して取敢ず一夜を過しました。翌朝「おい起さろ、ミサだ」と宿谷司祭に起され二人で聖餐式を献げましたが、これはその日以来、清里聖アンデレ教会の間を通しての毎朝の聖餐式として、歴代の牧師達によつて今日に至るまで続けられております。（植松従爾「須貝主教、前川主教の思い出」『ラボニ』p.11）。

戦時中、宿谷、植松の二人は共に中国に赴き現地邦人と現地人への伝道活動を進めていたが、植松はまもなく召集され甲府連隊に配属、訓練を受けた後、中国へ出征した。兵営の中で英国人主教に英語の手紙を書き、営内

で雑役をしていた少年に兵営外のポストでの投函を頼んだが、少年はそれを営内のポストに投函したために検閲を受け、以後、植松は上官に睨まれ、激しい制裁を受けた。

宿谷は、植松の応召後も中国に残留したが、戦況悪化のためにやがて帰国。満蒙開拓団入団を目指して、東京七生村（ななおむら）東京府の南西部、南多摩郡に属していた村。現在は日野市の一部）の東京府拓務訓練所で訓練を受けていたが、官憲に拘束された。

宿谷については、松岡正治による紹介を以下に引用する。

宿谷司祭は立教大学を昭和一四年に卒業後、中華民国で日本人だけでなく、中国人にも積極的に伝道を行っておられた。中国語も堪能であり、北京で先生に出会った聖アンデレ教会（東京）の信徒も驚いたと言う。帰国後すぐに憲兵隊に拘束され、ひどい拷問を受けている。頭部を強打され、聴力も著しく低下した。「中国人捕虜の流言飛語を日本兵が中国で吹聴している」と喧伝したとの謂れなき冤罪を被り、懲役一年、執行猶予五年の聖職者として最も重い判決を受けた。（中略）戦後すぐの昭和二二年（引用者注：正確には、一九四八（昭和二三）年で

ある）には清里聖アンデレ教会の落成式が行われたが、その翌年、宿谷司祭は新しい任務を与えられ、浜松聖アンデレ教会の牧師として赴任された。（松岡正治「宿谷栄司祭の思い出」『日本聖徒アンデレ同胞会機関紙MISSION』一六六号、二〇一九年四月二一日）。（宿谷司祭と一時行動を共にし、やはり官憲に拘引され拷問を受けた松本文司祭の文章を【資料1】として掲載する。）

#### (ii) 武藤六治

一九五五年には、植松は長坂の聖マリア教会に異動となり、その後清里アンデレ教会には武藤六治が赴任した。以下は、武藤からの聞き取りの記録である。

私の長兄勝一は清里駅に勤めていました。その関係で私はかなり昔から清里（と言っても本村には行きませんでした）を知っていました。私の母教会は中部教区の岡谷の聖バルナバ教会です。教区は違いますが清里から一番近い教会です。昭和二二年、宿谷・植松司祭が清里に来た直後から二人はいろいろの意味で岡谷の教会殊に竹淵静雄司祭に世話になったようです。

私は高校生二年生の時、竹淵司祭から聖職への道

を勧められました。余り深くも考えずに「はい」と答えました。あの頃の中部教区では立教↓聖公会神学院というコースを取る人が多かったのです。私は立教大学を受験することになりました。私の高校は工業高校でしたので受験勉強は大変でした（あまりしませんでした）。三年次の一二月末、立教の願書を取寄せようとしていた時、竹淵司祭が「おい六治、お前は今年立教には行かないんだ」。突然でびっくりでした。「では俺はどうするんですか?」「清里に行くことになった」。……私には何の話も相談ありません。という次第で清里聖アンデレ教会に転がり込むことになりました。植松司祭の家族の一人になったのです。昭和二十七年三月。何故こうなったかはその後誰からも聞いていません。（中略）。将来聖職になるなら一年くらい遅れてもきちんとした教会生活をさせようということだったでしょうか? しかも驚いたことにポール先生も私が清里の教会に来ることを知っていた・・・びっくりでした。（私はポール先生に初めて会ったのは清里聖アンデレ教会の竣工式の時、昭和二十三年です。）翌年立教へ、そして神学院。昭和三五年神学院を出て直ぐに清里聖アンデレ教会に。ここで執事・司祭に。二五年間清里の教会にいました。ポール先生の

晩年、二年半、毎週火曜日にポール先生のベッドルームでのミサは懐かしさの極みです。

(二〇二〇年四月二四日、筆者による聞き取り)。

これらの聖職者の働きによって清里聖アンデレ教会は、やがて、所属する横浜教区の中で最も盛んな教会の一つとなった。

(3) 一九五五年頃までに清里に赴任・常駐した人々

(i) 関口正吾

二人の聖職に続き、清泉寮の復旧専従者として、一九四六年七月に関口正吾が現地派遣された。清泉寮は、日米開戦を間近に控え閉鎖を余儀なくされ、ポール・ラッシュユからその維持管理をBSAが託されていたが、やがてその管理が立教に移され、更に藤倉学園に売却されて、その間荒廃が進んでいたのである。

関口正吾は敗戦の時にはソウルで教師をしていたが、九月には帰国した。そして早くもその一〇月にはポール・ラッシュユと再会を果たしている。以下はそれ以降の事に関する関口の回想である。

昭和二〇年十一月、ポールに頼まれて清泉寮を調べに行つた。列車の接続が悪くて、長坂から大泉の

水産講習所を通って、清泉寮まで歩いて行った。現地に着いて見ると、清泉寮は屋根に穴が開き、窓は破れていた。わずか数年で、どうすればこんなに壊れるのか、狐狸のすみかではないかと思うほど荒れ放題だった。一時間ばかり見て、状況がつかめたので、すぐに長坂駅へ歩いて帰った。東京へ戻ると、ポールに報告に行った。「いったいどうなっているんだ」とせわしく聞いてきた。荒れ果てた様子を説明すると怒りだったので、「俺に怒るなよ」となだめた。(中略)

そのうちに、私も昭和二二年の夏、ポールから「ちよつと手伝つてくれ」と言われ、清泉寮復旧の専従者として清里にいくことになった。(中略)職人がいるわけもないし、私が一人でコールドールを溶かし、屋根に塗っていった。でも、コールドールはなかなか溶けなくて困ったものだった。泊まるのは清泉寮だが、補修が終わっていないので、雪が降ると、部屋の中まで雪が吹き込み、部屋の中を逃げ回った。わずか数年の期間の不在だったのに、清泉寮の屋根や床は腐っていた。補修のための木材やガラスを川上村まで買いに行った。

全くの素人が、金槌を持って、ポールがくれる軍隊の野戦食缶詰で自炊しながら、一人で清泉寮にこ

もって、家内を茨城において、補修作業を黙々とやった。風呂桶もないし、夏は夕立がくるまで待つて、体を洗った。山から流れてくる水も使ったが、あるとき水が悪くて大腸カタルにかかってしまい、甲府の病院まで連れていってもらったことがある。それで、兵隊が来てダイナマイトで井戸を掘ってくれたので、その井戸浚いもした。

二一年夏に清里に行って、そのまま二三年まで帰れなかったが、本当にいい経験だった。

(中略) 僕の給料は、立教大学から職員として毎月書留で送られてきた。ポールと佐々木総長の話し合いで、立教の清泉寮担当に張り付けられていた。(井尻 2019 pp. 52-53)。

#### (ii) 金子忠雄

一九三一年に立教大学商学部を卒業した金子は、アメリカの映画会社 M.G.M に就職したのち間もなく退職して、一九三二年五月に B.S.A の専任書記となり、一九三一年以来この任務についていた宅間聖智とともに、会の運営に当たった。卓越した英語力の持ち主で、ポールのラッシュの通訳を務めアメリカでの募金活動に同行したこともあった。また、ポールがアメリカン・フットボールを日本に導入するにあたって、試合の中継放送の通訳



をしたり、ルール集の翻訳にあたりたりしている。このような語学力の獲得には、学生時代に根岸由太郎教授から同時通訳の方法を含む英語の訓練を受けたことが土台となっている。

清里との繋がりは、先にも述べたように、山梨県にキャンプ場を建てるにあたり、関口とともにその候補地探しに当たったことに端を発している。土地を借用するにあたり、山梨県との折衝にも活躍した。

敗戦後も金子はいち早くBSAの活動に参画し、前述のように、一九四六年一月二八日に、BSA再出発にあたっての役員として、副会長に選出されている。

一九四八年、清里での農村センター構想が本格的に始動するにあたり、金子は下記の八木立三とともに現地に移住した。当初は家族を東京に残しての赴任であったが、やがて子どもたちも呼び寄せ家族ぐるみの生活となった。一九五〇年一月、日本の食糧自給のため高冷地農業改革を目指して清泉寮農場研究委員会が発足したが、金子はその発足・運営を支えた。清里に結成されたBSA清里支部でのリーダーシップ、やがて展開される弘道所（アウトリーチステーション）設置に関する活躍については『キープへの道』でも詳しく紹介されている。金子は、清里はじめ近隣町村が合併した高根町で教育長にも推された。

金子はその後、一旦東京に戻り、一九六〇年前後に再び清里に転じ、一九八〇年頃までここで活動した。（前掲、武藤からの聞き取りによる。正確な日時は不詳）。

一九五六年、財団法人キープ協会設立にあたっては、専務理事・ポール・ラッシュ、常務理事・宅間聖智、金子忠雄、名取良三という陣容が組まれた。一九七〇年のBSA総会で会長に推されている。一九八三年四月一〇日に亡くなったが、それはポール・ラッシュの逝去ひと月前であった。生涯を通じてポールの介添え者であり先導役であった金子は、その死にあたっては道案内を務めたと言えるであろう。

### (iii) 八木立三

武藤六治は、『キープへの道』には、八木立三さんのことが名前だけしか出て来ません。しかし本当はこの方がキープの初期の大変な時の一番の功労者です。」と述べている。（武藤六治「忘れ得ぬ人 ポーロ八木立三執事のこと」『日本聖徒アンデレ同胞会機関紙VISION』一六七号、二〇一九年七月二七日）。以下に述べる八木の経歴は、この武藤の記事、および（井尻 2019）によっている。

八木は一九三六年に立教大学予科に入學、すぐにBSAに入会しその活動に励んだ。戦時中、繰り上げ卒業で

軍隊に徴集されたが戦傷を負い兵役免除となった。

東芝で働いていた八木は、戦後、ポール・ラッシュユの元でBSA活動に復帰し一九四六年、同会主事となる。一九四八年一〇月には、BSAが立ち上げた「清里農村センター」の働きの為に、その主事として金子忠雄とともに家族ぐるみで清里に赴いた。

「二三年の頃は、日本全体が貧しく、どん底でした。そして、冬の寒さは今とは比較にならないほど厳しかったです。その中で、清里開拓の生活は、今では想像もつかないほど貧しく、日本全国でも最低のレベルにありました。」(井尻 2019, p. 263)。

八木は「農村センター」について、地域住民の理解と協力を得ることが必須の要件であると考え、何キロも離れた村々を訪れ話し合いの時をもった。戦傷のために歩くのが不自由だったが、その足で石ころだらけの山道を歩いての村人訪問だった。八木の飾らない人柄は村人たちに受け入れられ信頼されるようにもなった。その結果、清里赴任の二年目(引用者注)議員選出の時期については、資料により差異があり、筆者は確定できていない)には、推されて村会議員に立候補しトップ当選を果した。他所から来た所謂「よそのもの」が、生み出した結果に多くの人が驚いたという。

BSAは北海道にも「農村センター」設立の計画を立

てそれに着手した。場所は道南中央部の新冠<sup>にいかわ</sup>で、そこからこのプロジェクトは「NEEP」と名付けられた。一九五三年、八木はNEEP設立の為に新冠に派遣された。この地域の生活の厳しさは、清里を凌ぐほどであった。ここでも彼は、教会を中心に村人との連携を図りながら努力を重ねた(資料2参照)。しかし本部からの資金調達が不可能となり、この計画は中止となった。村人と本部の間に入って板挟みになった八木は苦しい思いをしなければならなかった。

一九五七年四月、一時清里のKEEPに戻ったが、一九五九年からはBSA本部の伝道主事、総主事として東京勤務となり、BSAの諸活動(支部と連携の強化、月刊紙ビジョンの発行、日本聖公会学生信徒協議会の発足、毎年清里で行ったBSA夏季協議会キャンプ、ジュニア・キャンプのディレクターとしての計画・実施などの為に尽力した。BSA精神に基づく松戸宣教にも力を注ぎ、現在の横浜教区松戸聖パウロ教会の基礎を築いた。一九七三年一月にBSA主事を退任し、一九七四年から教役者の道を進み、伝道師を経て一九七八年執事に按手された。

武藤は、「飾らず、誇らず、謙虚に生き働いたBSAの先輩、八木さんは一九八三年(昭和五八年)四月一〇日、天国へ旅立ちました。六七才、少し早すぎる旅立ち

だったかな？でもBSAを通して主のご用を十分に果たされた密度の濃いご生涯でした。」と述べている。八木の活動について、妻の八木文子が語っている回想を【資料2】として掲載する。

#### (iv) 宅間聖智

戦前に立教大学で発足したBSAにおいて最初の専従の書記になったのは宅間であった。従ってBSAの諸活動に最も深く関わった一人がこの人であったといえる。「キープへの道」では、ポール・ラッシュユとの関りを含む宅間の活動の様子が詳しく描かれている。

以下は、筆者による武藤六治あての聞き取り調査の記録である。武藤の妻満理子は宅間の長女である。

宅間聖智（私の家内の父親です）の家族は、戦前立教構内（五号館）にポール先生と一緒に住んでいました。戦争開始の翌日ポール先生が収容されましたが、それ以後もポール先生が帰国するまで、連絡、差し入れなど世話をしていました。そして家族はそのまま立教におり、宅間は立教大学のアメリカ研究所の事務員となりましたようです。（戦争中もアメリカ研究所は存在していたようです）。その間、宅間は何回か清里の清泉寮を訪ねたようです。ポール

先生との関係からでしょうか、宅間は戦時中憲兵に尾行されたそうです。そう言えば、同志社大学が、昭和四〇年頃『戦時下のキリスト教運動』という本を出しました。警察からの資料によるものです。この本の中に宅間聖智の名前が出ていました。何かのコメントがついていましたが忘れしました。とにかくブラックリストに載っていた訳です。もともとあの頃は多くの聖職・信徒が睨まれていたのだと思いますが。

宅間の家族は戦後も立教構内にいました。五号館とは別の住宅だったそうです。立教の職員は続けていました。その後、当時ポール先生が借りていた麻布にある大きな建物（アンデレハウスと言っていました）の脇にあった住宅に移りました。そこから清里に移ったのです。（私は立教生の時一年間アンデレハウスに住みました。）そして昭和二六年頃にBSAのポール先生の働きに戻り、昭和二八年頃からキープ内に家族で住みました。

当時のキープの全職員の一覧を【資料3】として掲載する。

#### 4. 学生たちの奉仕

##### (1) 黒田哲朗

戦前に清泉寮開設にあたってなされた学生たちの労働奉仕は、戦後再開された清泉寮の活動を支えるためにも行われた。以下は、新制大学第一期生である黒田哲朗の回想<sup>(7)</sup>である。

私は昭和二三年に立教の理科工業専門学校（理専）に入学しました。理専に入学したのは、昭和二四年四月に立教大学と聖路加国際病院が協力して、理専を昇格させて医学部を創設すると聞いていたので、その医学部に進学するつもりでした。

理専に入学して間もなくのある朝、チャペルの前を通りかかった時に、たまたま竹田鐵郎神父に出会い、誘われて早朝礼拝に出たのが切っかけとなり、ファーザー竹田と岩井祐彦チャプレンの導きにより、昭和二三年十二月二一日にチャペルで洗礼を受けます。

ところが秋になると医学部設立は沙汰止みになってしまいました。私は、戦後の新しい六・三・三・四制のもとで新設された理学部化学科の第一期生となりました。

学内活動では、チャペルではさゆり会（日曜学校）の先生となり、中学生を受け持つようになりました。またBSAの復活に加わり、立教大学支部を復活させ、第二支部（児童宗教教育）に所属し、併せて第五支部（理学部）、第八支部、第一六支部の創設並びに活動にも関わりました。当時のBSAでは、足立省一郎さん、吉田忠雄さん、吉岡さん、武田さんなどが中心になって活躍していました。

BSAのメンバーは、毎年の夏休みに学生部の伊達宗浩さんをリーダーとして清里で労働キャンプを行いました。主な作業は、清泉寮のキャビンの修理、清泉寮に通じる道の補修・整地などでしたが、火山灰地なので火山岩が多く、雨が降ると火山灰がドロドロになるなどして、車のわだちが土を深く削り、石のゴロゴロした道を直すのは本当に重労働でした。このキャンプに参加したのは毎回一五〜二〇人位でした。ですから戦後の労働キャンプ参加者は延べ数百人になると思います。

私は、昭和二八年三月に理学部を卒業しました。引き続き四月より経済学部・経営学科三年に編入学し、昭和三〇年三月に卒業して就職しました。

（筆者による聞き取り。二〇一八年五月および二〇一九年一〇月）。

## (2) アメリカからの学生たち

労働奉仕に加わった学生の中にはアメリカから加わった学生も混じっていた。当時キープに勤務していた廣嶋都留<sup>(8)</sup>はその事情を以下のように語っている。

アメリカでは John F. Kennedy 大統領によって、一九六一年に若者たちによる対外ボランティア活動 Peace Corps が創設され、学生たちは学校を休学してアフリカなどに平和部隊の一員として参加するようになりました。清里にも一九五九年頃から、高校生、大学生が夏休みに work camper として来始めていました。

小海線の線路際に建つ「清里農村センター」の門柱は、San Rafael Military Academy の学生たちが校長先生にハツパをかけられ、清里農業学校の生徒たちと一緒に川俣川から石を掘り出して担ぎ降ろし建てたものです。また、ユースキャンプ場にある、レノックス野外礼拝所はマサチューセッツ州、Lenox 高校の学生達の奉仕で出来上がったものです。

(筆者による聞き取り、二〇一八年四月一五日)。

## 6. キープ協会設立の推進者

一九四六年、BSA は清里での活動を再開し、日本の農山村の民主的復興のために「清里農村センター」構想を策定した。そしてその年の二月二十八日、BSA 再出発にあたっての役員として、会長に小川寛一を選出したのである。その任期中の大きな出来事は、元来伝道組織であった BSA から、農村センターの事業「清里教育実験計画」(Kiyosato Educational Experiment Project = KEEP) を分離し、それを運営するための財団法人として、「キープ協会」を設立したことである。

### (1) 小川寛一

小川は一九二七年、立教大学入学。学生時代はポール・ラッシュの宣教師館によく通ったが洗礼を受けたのは卒業間近で、BSA への所属も二、三ヶ月に過ぎず、そこでの活動はほとんど無かった。卒業の年にシティブランクに勤めたが、一九三八年四月にはそこを退社し父の経営する会社に勤務するようになった。その時にポール・ラッシュから声がかかり、おりしも開始されていた清泉寮の建設工事を手伝うこととなった。BSA 本部会計の小川が担当したのは主に資金繰りで、アメリカからの援助資金が届かず、工事が中断しかねない状況のもと

で業者と折衝を重ねたり、急場を凌ぐための借金に奔走したりした。

財団設立にあたっての準備について小川は次のように回想している。

僕も法令のことはよく知らないが、その事情（引用者注・財団法人設立の必要性）は理解できるのでポールさんに賛成したんです。では、財団法人をつくるにはどうすればよいかと言うことになって、まず発起人に一流の人の名前が必要だろうと、ポールさんは日米協会会長の小松隆さん、ロータリークラブのガバナーのジョージ東ヶ崎潔さんの名前を挙げて、お前は誰か財界人を挙げろうと言うので僕は日本銀行の筆頭理事だった五十嵐虎雄さんを推薦したんです。それに聖路加病院の橋本寛敏院長、立教大学の佐々木順三総長、それにポールさんと僕を発起人ということにして、何回か帝国ホテルで設立準備会を行いました。（『同胞会史』1997 p.188）。

小川は一九五五年までの一〇年間、会長としての重責を担った。その任期中は、BSAも、その傘下の農村セクターも、そしてキープ協会も「新生」の意気にあふれ活気が漲っていたといえるであろう。

## （2）加藤晃義<sup>9</sup>

加藤は、日本電気社員として勤務の傍ら、キープ協会の仕事を手伝うようになり、キープ協会立ち上げにあたってポール・ラッシュユから依頼を受け、認可にあつての関係省庁、その主管大臣との折衝など重要な役割を果たした。その回想によれば、

キープの設立準備委員会は昭和三十年十一月十日、東京のソ連大使館の裏にあったアメリカンクラブで開催したが、実は、その後の法人設立の準備作業は若いころの僕がお手伝いでやっていた。翌年の三月二十六日に文部大臣の法人設立の認可をもらうまでの作業を担当した。（井尻 2019 p.326）。

のであつた。その折衝の様子を語った加藤の回想を【資料4】に掲載する。キープ協会という財団法人の発足が、このような少壮の人の活躍によって進められたことは興味深いことであつた。

## 7. キープ農場を支えた人たち

### （1）茅野達一郎

茅野の戦前戦中までの活躍については本稿（二）にお

いて既に述べた。戦時中の極めて困難な状況下で清里の酪農の先鞭をつけた足跡は貴重である。岩崎によれば、茅野は戦後、開拓地の若い世代のメンバーとともに「振進会」と名付けた研究会を組織し農業全般に関わる勉強を進めていた。(岩崎 1988 p.132)

ところで、「日本聖徒アンデレ同胞会年表」によれば、キープは、一九五〇年一月に、日本の食糧自給のため高冷地農業改革を目指して「清泉寮農場研究委員会」を発足させた。そのメンバーは、

委員会 茅野達一郎 (県営八ヶ岳開発入植者)

地元農民

顧問 若色国三郎 (県立清里農民道場長)

海老名昌二 (文部省野辺山実験道場)

柿崎 (清里帰農組合長)

であり、九月には乳牛の飼育を開始し八ヶ岳山麓の酪農の原点となった。(『同胞会史』1997 p.33)。そして一九五一年には高冷地実験農場が奉獻され、翌年、「オハイオ高冷地実験農場」と命名された。この研究会の推進役は茅野であり、キープの酪農は彼によって主導されたのである。

茅野は一九六三年、一旦キープを退職し清里を離れ、東京の日清製粉に勤務したが、約二〇年後に再度復帰し、一〇年ほどキープ協会常務理事を務めた。清里聖アンデ

レ教会の信徒であり洗礼名はペテロである。B.S.A.の理事、評議員にもなっている。退職後は北海道に移住した。

## (2) 船木常治

船木常治は一九三八年、小河内ダム建設に伴う立ち退きによって、山梨県丹波山村から清里に入植した。兄弟が多かった常治は叔父に預けられ、一三歳で両親兄弟から離れての移住であった。やがて独立して荒野の開拓に取り組んだがその苦勞は並大抵ではなかったはずである。

戦後一九四七年に清里農村センターに就職。センター内にあつた診療所の手伝いをしていた美三子と結婚。実験農場では茅野農場長のもとでその片腕として働き、一九五八年から一九七一年までその後継として農場長を勤めた。

常治の子息である上次は、つぎのように書いている。

「両親は一年中、朝から晩まで働く過酷な生活だったが、全ての人に誇りを持たせたいというポール先生の理想に向かって着実に前進していた。いつも夢があり、前向きだった。

親父の給料は警察官の半分しかなかった。しかし、いつも明るい母は愚痴をこぼしたことはない。お金よりも、自分の行動によって誰かが喜んでくれ

ることを何より大事にした、利他の精神の強い両親だった」。(船木上次「親の背中」『山梨新聞』二〇一六年七月一五日)。

【資料3】で奈良が述べているように、キープ協会の職員の給与は、元来貧しい地域である清里でも最低のランクであった。上次が通う小学校での所得調査では、彼の家の収入はクラスで一番低かったという。このような条件のもとで力を尽くしたスタッフの働きを私たちは再認識しなければならない。

## 8. まとめに代えて

本稿で取り上げた人々は、ほとんどが立教大学在学中にポール・ラッシュの薫陶を受け、その感化によって、BSAやキープ協会の活動に身を投じ生涯をかけてこれに取り組んでいる。しかもその活動条件は、厳しい自然環境、低賃金など、恵まれたものとは到底言えぬものであった。それだけにポール・ラッシュの理想、構想力、行動力、人間的魅力の大きさを思わずにはいられない。と同時にキリスト教のメッセージが当時の若者に与えたインパクトの強さ、敗戦後間近な社会が持っていた新生日本に向かおうとするエネルギーが背景にあったことも

重要な要素であろう。

本稿の執筆により、これらの人々の直面した困難や労苦の大きさは知ることができたが、それらを凌ぐ喜びや、満足感、逆の、内面的苦悩や不安などについてはまだ十分には掘り下げることが出来ていないと感じている。本編のテーマに該当すると思われるものの本稿ではあえてとりあげなかった事例も数例ある。特に医療関係者は除外した。他日を期したいと思う。

「はじめに」でも触れたが、二〇一九年に、井尻俊之氏により『PRO DEO ET PATRIA』ポール・ラッシュ博士を語る証言録』が刊行された。同書はラッシュと繋がりがあった多数の人物との膨大な面接記録である。キープ関係資料として貴重な証言録である。本書は「立教大学の池袋キャンパス一〇〇周年、諸聖徒礼拝堂聖別一〇〇年の記念行事に賛同して企画制作されました。」(同書まえがき)とのことで、立教学院としても、その貢献に深甚なる謝意を表さねばならない。

本稿執筆にあたり、資料提供、資料収集、聞き取り調査などのために、武藤六治、船木上次、廣嶋都留、黒田哲朗、松平謙次の諸氏にお世話になった。記してお礼を申しあげたい。



## 9. 資料

### 【資料1】松本文の回想

「須貝主教様がお亡くなり」 司祭 ヨハネ 松本文

その翌年一九四五（昭和二十）年二月二日、聖母御潔めの日、被猷日の朝、小雪まじりの寒い朝でした。私と先輩の故宿谷栄師の二人が訓練中の東京都七生村満蒙開拓訓練所に私服憲兵四人がつかつかと入り込み、ウムを云わさずガチャリ！手錠をかけられ衆目の中を市電をのりつぎ東京九段下の東京憲兵隊司令部へ連行。まづ調べ室で素裸にされて身体検査。眼鏡も時計もはづされ、ベルトから猿又（その頃ゴム入りパンツはなかった）の紐までぬかれ（自殺予防のため）暗い地下室の留置場（ブタ箱）へほうり込まれた次第。

「貴様はスパイだ、だから満州へ行くんだ。教会合同をしないのがその証拠だ。」「アラヒトガミ（氣をツケー）の天皇陛下とお前らのキリストとどちらがエライか」など、およそ愚にもつかぬ尋問です。そしてそのたびになぐる、けるの暴行です。

そして私がほうり込まれていた、その同じ獄に二ヶ月后、須貝主教様もつなされたのでした。でもさすがに主教様には乱暴はなさらなかったようです。何しろ私は二十五歳の一番年若き青年でしたから、なぐり甲斐があつ

たのでしよう。

前後は素通しの木の格子、三帖位の広さの獄に大の男が四人。しかもそのうち半帖は、一尺（三十三cm）ほどの仕切りでまたげば、すぐ便所。（ボール紙のふたがある）

一々憲兵に断つて用便。紙すら、その度に貰う。恥の思いすらウスらいでゆく。（中略）。祈り黙想以外にはすることのない毎日でした。寒い獄の中ヒゲもそらず、きたきりすずめの私達。（後略）（松本文「須貝主教様がお亡くなり」『ラボニ』pp.10-11）。

### 【資料2】八木立三に関する八木文子からの聞き取り

（清里での活動）

しかし、村の人たちは、センターは、アメリカの援助で勝手に事業していて、自分たちとは関係ないという雰囲気でした。八木は、センターと村人の融和を図るため、村人との協力なくしてコミュニティセンターの成功はありえないとの考えで、当時私たちの所から一〇キロくらい離れた本村にある村役場を訪ねたり、部落ごとの青年団、女子青年団の集まりに積極的に飛び込んだりして、協力を訴えていました。

なにしろ車などない時代でしたので、二本の足で歩くより他なく、朝出掛けても帰りは深夜ということも度々でした。当時はどこもひどい砂利道で、雨が降ればドロ

下口にぬかるみ、お天気が続けばもうもうとした土ぼり  
りで一年中長靴が手放せませんでした。

センターを出て、行きは下り坂、帰りはどこまでも上  
り坂の村との往復で、八木にとっては戦争で負傷した足  
のリハビリになったのでしょうか。痛みは一生続きました  
が、歩くことには不自由しなくなりました。

八木は都会育ちでしたが、要領の良さが皆無の人でし  
た。しかし、天衣無縫のところがあり、地元の人たちには  
「ヤン教だ」、「東京の来たり者だ」、「お高くとまっ  
ている」と陰口をきかれたのですが、そんなことには関  
わりなく、カンテラを下げて、夜道を歩いて、農家を訪  
問して、話を聞いて回りました。どんな農家に行っても  
気軽に声をかけ、あがりこみ、かけた茶碗でお茶を飲  
み、よもやま話をするのが大好きな人でした。八木が  
行くと、どんな農家でも、味噌汁や漬け物を出してくれ  
て、一緒になって「おいしい、おいしい」と食べると、  
「東京者が同じものを食べてくれた」と農家の人も喜ん  
でくれたということです。

こうして八木は村の人たちと親交を深め、センターへ  
の協力も得られるようになったのです。三年ほど経った  
とき、村会議員選挙に村の人たちに懇望されて立候補  
し、よそ者なのに当選したのです。(井尻 2019, pp. 264-  
265)。

#### (新冠での活動)

開拓村はアイヌの伝承で新冠雲熱府(うんねつぶ)と  
いう地名で、ここは戦前の御料牧場の跡で、戦後に満蒙  
開拓の引揚者と御料牧場で働いていた人たちに払い下げ  
られ、その人たちが開拓農民として入植していました。

新冠は、清里のような山地ではなく、土地の地味は良  
かった。しかし、満足に住める家など一軒もなく、どの  
家も間に合わせの掘っ立て小屋でした。風呂もなく、冬  
には着ているものも体も真っ黒のまま寝るしかなかった  
のです。それは、清里も同じで、全国の開拓地でみんな  
原始時代の生活をしていたと思います。

八木がこんなひどい生活に飛び込んでいったのは、や  
はり戦後の日本の再生のなかで、教えを伝えようという  
希望があったからだと思います。(井尻 2019, p. 265)。  
(聖職として)

八木は、伝道師から執事までなって、それ以上の出世  
をすることを拒んでいました。しかし、執事では教会の  
大切な聖餐式ができなかったので、司祭になることを心  
に決めて、願書を出したら、再び病気になるってしまった  
のです。五八年四月一〇日、六七歳で亡くなりました。  
気管リンパ腫でした。彼の生涯は、戦争で九死に一生を  
得て、B S A に生涯を捧げ、牛込聖バルナバ教会の執事  
で終わりました。B S A の「信徒一人が一人をキリスト

の許に」という教えに生涯を捧げたと思います。(井尻 2019, p.288)。

【資料3】一九五〇年前後(昭和二〇年代) キープの職員とその暮らし

(キープの職員)

奈良によれば、戦後間もなく活動が始まったセンターの職員は以下のようなメンバーであった。( )内は出身地

清泉寮(昭和一三年設立)

宅間聖智(東北)、金子忠雄(東京)、八木立三(東京)、有村武熊、瀬戸譲二(東京)、與水国雄(山梨)、矢野晴彦(東京)、宮崎淳一<sup>10)</sup>

宿谷栄(東京)、植松従爾(秋田)

高冷地実験農場(〳二四年設立)

茅野達一郎(東京)、船木常治(山梨)、高見沢友勝(長野)、星野太助(山梨)

聖ルカ診療所(〳二五年設立)

萩原一輝(東京)、江口篤寿(東京)、植松喜久江(千葉)、武藤高明(長野)、高見沢まき子(長野)、棚橋久代(山梨)、田波あいじ(長野)、浅川花子

(山梨)

聖ヨハネ図書館(〳二六年設立)

首藤仁子(宮城)

〔昭和二〇年代のセンター職員〕奈良 1992, p.109)。

(キープ職員の暮らし)

奈良はこれらスタッフの生活条件について次のように書いている。

その時期が敗戦後の混乱期であったし、その場所が「小海線の線路上」という、もともと人の住めなかった極寒の地であって、まして固定収入の乏しい他人の淨財に頼った事業である。寄付金は金持ちアメリカからばかりではなかった。八ヶ岳山麓の開拓者からも善意の「貧者の一灯」が寄せられたのである。今にして思えば、ボールさんといえども貧しかったし、スタッフの給料は薄給のきわみだった。

夕暮れ、教会から聞こえてくる鐘の音は人の心を洗い澄ませてくれるものがあつたが、「祈りと奉仕」を motto にこの地に住むということは、命がけ必死のことだったのである。

事業の草創に苦勞はつきものである。この時期、ひもじさは農村センター内にあつたし、貧しさは帰農隊とうつつかつた。どんなに理想が高くて、どんな

に信仰が固くても、「線路上」に住むということは生易しいことではなかった。去る人、倒れる人があったとしても当然である。

清里農村センターの給料では職員は食っていけないかった。たとえ食っていったにしても、それは生存ギリギリのものだった。清里の自然に魅せられ、ポール・ラッシュの理想に共鳴しながら、現実の給料の安さに泣いた日本人がいかにか多かったことか。(奈良 1992 pp.108-110)。

#### 【資料4】法人認可折衝に関する加藤義晃の回想

僕はポールが歴代の首相と親しくしているのを知っていたので、トップダウンを思いついた。申請当時の首相は、五十五年体制と言われた鳩山一郎の内閣。ポールはGHQの将校としてパージ（公職追放）を担当していたので、政財界の権力者との人脈があり、当時の吉田茂や片山哲、鳩山ら政治家とも親しくしていた。

鳩山首相はGHQの占領中にパージされたことがあつた。たぶん首相は、ポールが自分のパージに関わっていたと思っていたのではないかと思う。ポールは、すぐに官邸に電話で連絡をとってくれて「加藤という若い者が相談に行くので話を聞いてやってくれ」と頼んだ。

トップダウン作戦が凶に当たり、僕は生まれて初めて首相に呼ばれて官邸に乗り込んでいった。鳩山首相は、

私の手書きのキープの法人設立認可の申請書をご覧になって、牧場の計画があるものだから、その場で河野一郎農林大臣をお呼びになられた。僕はそのとき二十四歳の若造だったが、ポールさんの力のすごさを思い知った。

河野大臣はすぐに官邸にやってきた。彼がすごいと思つたのは、申請書をパラパラ見るなり、「総理、これは農林省所管ではありません。計画全体は教育団体ですよ」とその場で判断できた。

鳩山首相も「それならば、文部大臣を呼べ」と秘書官に指示すると、安藤正純大臣もすぐにやってきた。若造の僕が、今度は安藤大臣と名刺交換して、申請の趣旨を説明すると、安藤さんはその場で「承知しました。文部省で引き受けます」と即答してくれた。<sup>(1)</sup>

文部省との交渉は、何回か呼び出されて、とんとん拍子で話が進み、途中で大臣が松村謙三さんに変わつたが、予定通り三月二十六日に設立認可をもらうことができた。全く異例の扱いだった。それは僕の方ではなく、後ろにポールさんがいたからだだった。(井尻 2019 p.327)

#### 註

(1) 清泉寮は一九三八（昭和一三）年七月に竣工しているので、この年度は不正確である。

- (2) 『日本聖徒アンデレ同胞会年表』(『日本聖徒アンデレ同胞会史』日本聖徒アンデレ同胞会、一九九七年)二〇頁。
- (3) 【伊達宗浩】立教大学卒業。戦時中は応召しシベリアに抑留された。帰国後立教大学に就職し事務方の中枢を担った。B S Aでも会長を務めた。
- (4) 【キープ三〇・清泉寮四〇周年記念『永遠の生命の泉湧きいつべし』ヨハネ伝四―一四(植松主教撰)】(キープ協会、一九八三年)二―三頁。
- (5) 【宿屋】『「こしま屋」という宿屋の二階を借り切って寝泊まりし、握り飯の弁当を持って毎日駅から現場まで灌木を切り開き、根を掘り起こして道づくりをしたんです。相当きつい労働でした。』(清泉寮建設への道)〈対談〉の中の伊達の発言(前掲、『同胞会史』一五七―一五八頁)。
- (6) 戦時中官憲によって投獄され身体への負荷を負った佐々木主教は釈放後もその回復をはかることができなかった。そのような状況下にあっても、戦後の日本聖公会を主導し、その課題は、農村部への宣教の拡充であると考え、ポール・ラッシュの活動にも共鳴した。なお、この時点では、日本聖公会には首座主教というポストはなく、佐々木は主教会議長であった。
- (7) 黒田は大学卒業後、昭和一九年に制定・施行された、外貨獲得のための「輸出振興法」に基づき新たに設立された国策会社に就職。その後数社で勤務。その間も日本B S Aの活動に参加。一九八八年に退社してキープ協会に勤務。常務理事となる。また立教学院評議員、日本B S A副会長を務めた。
- (8) 【廣嶋都留】旧姓中谷、名取。早稲田大学を経て一九五四年にミシガン州立大学、同大学院にフルブライト二期生として留学。帰国後

キープに勤め、地域対象の活動を展開し、またポール・ラッシュの秘書を務めた。

- (9) 【加藤見義】元・日本電気社員、元、NECコンピュータシステム社長。加藤は、キープ協会理事・名取良三の義理の弟(妹の夫)であるという縁から、日本電気社員として勤務の傍ら、キープ協会の仕事を手伝うようになり、最終的に財団法人キープ協会理事長を務めた。
- (10) 【キープのスタッフ】宅間聖智、金子忠雄、八木立三はB S Aのスタッフであったが、キープ協会の発足に伴い関口正吾とともに同協会に移籍した。また有村武熊は小川寛一の経営する会社の社員であったが、他の数名とともに清里に派遣された。
- (11) 【安藤大臣】上記の時点で文部大臣はすでに安藤氏から松村謙三氏へと代わっていた(井尻氏の指摘による)。

#### 引用・参考文献

- 日本聖徒アンデレ同胞会『日本聖徒アンデレ同胞会史』(日本聖徒アンデレ同胞会、一九九七年)。
- 奈良靖夫『清里昭和史散歩』(朝日新聞東京本社朝日出版サービス、一九九二年)。
- 山梨日々新聞社編『ポール・ラッシュ伝』(山梨日々新聞社、一九八六年)。
- 岩崎正吾『感激の至詩情、楽土を拓く 清里開拓物語』(山梨ふるさと文庫、一九八八年)。
- 井尻俊之編『PRO DEO ET PATRIA ポール・ラッシュ博士を語る証言録』(二〇一九年)。
- エリザベス・A・ヘンフィル著、松平信久・北條鎮雄訳『キープへの道 昭和史を拓いたポール・ラッシュ』(立教大学出版会、二〇一八年)。